

国語表現

date : 年 月 日

学習内容：評論

青空 岡本太郎

学籍番号

氏名

青空

岡本太郎

春が開け始めた。  
明け方、うつらうつらしていると、肌に触れてくる空気は柔らかい。昔の人が言ったように、いつまでも寝られる思いだ。  
今朝、床を出て、寝巻のまま庭に飛び出した。まだ少し肌寒いが、すがすがしい天気だ。

空を見上げる。晴れ晴れと澄んでいる。

——空は青いんだなあ——空って、青かったんだな、と思う。

そして腹の底からむくむくと笑いがこみ上げてくるのだ。私はよくそんなばかしく子供っぽい気分を躍らせた。空は青いにきまっている。しかし、このひどく単純な感動。……私は思う。大昔から人間は空を見上げては、その青さを総身にやきつけた。そんな人間の自然への喜び。それを今日、たとえ何歳になっても、感じ続けるべきだ。

ところで、いつの時代からか、人間は、いや大人どもは、晴れた朝に無感動なのだ。天気がよければ結構だ、悪ければ雨具の心配でもする、たいていそんな程度の反応しか示さない。

雨が降るときや天気が悪い。犬が西向きや尾は東。もうきまりきったことだというように。

しかし、だれでも、もう一度、無心に空をふり仰いで見るといい。その色は、かつて見た「青」ではないのだ。生まれてきて、今はじめて発見する輝き。広さ。はじめてぶつかる、一回限りの。すると、あ

【語句の意味】

総身 全身。

無心 夢中になること。無邪気。

拡充 規模を拡張し、充実させること。

屈曲 折れ曲がること。

エッセンス ものの本質。

精髓。

目を凝らす じっと見つめ

る。



あ空が青かった、ということに驚く。  
そういう無邪気な感動こそ、人間生命にとって貴重だ。透明な目、心に人間の誇りが拡充されてゆく。

対自然ばかりではない。人間同士、日常生活の中で「田中」ってやつはああいうやつだ。「鈴木」はこんな人間だと、お互いが決め込んで、型どおり、適当なつき合いしかしない。会えばあいさつするし、調子のいい口はきくが、互いの生命の肌には触れることがない。

ところで、他人を型にはめ込んでしまわず、自分の生きるふくらみとして、いつも積極的に見返せば、思わぬ新鮮な人間像を発見するに違いない。だれだって生きている。そしてその切実さには、大なり小なり、独自の屈曲があるのだ。

私は他人と言ったが、親子、兄弟、夫婦の間だって、本当に触れ合っていると言えるだろうか。

他を発見するということは、自分自身を発見することであるし、また他は発見されることによって新しい自己に目覚める。ともどもに深まるのである。

例えば芸術の天地はそのエッセンスだ。だれでもが当たり前のこととして見過ごしている世界に目を凝らし、瞬間瞬間に発見し、驚きを聞いてゆく。それが芸術の役割である。科学だって、対象の世界こそ違うが、同様に新鮮な目によって発展していく。

繰り返し言う。素朴に、無邪気に、幼児のような目をみはらなければ、世界はふくらまない。

岡本太郎

日本を代表する芸術家。1930年から1940年までフランスで過ごす。抽象美術運動やシュルレアリスム運動とも接触した。

ピカソの影響を受けたとされる前衛芸術家。和製ピカソとも称される。

・「EXPO70(大阪万博)」の太陽の塔

・「芸術は爆発だ」

・maxell ユデオカセットのCM

・「ガラスの底に顔があっても良いじゃないか」

・ロバートブラウンのCM ウィスキー一本にガラスが一個ついてきた

